

*The 30th Annual Meeting of The Japanese Society of Inflammation and Regeneration:  
Joint Meeting with The 9th World Congress on Inflammation  
Kazuhiko Yamamoto\**

第30回日本炎症・再生医学会の開催  
—国際炎症学会との合同開催に当たって—

山 本 一 彦\*

このたび、平成21年7月6日から10日まで、国際炎症学会との合同開催として、第30回日本炎症・再生医学会を開催する運びとなりました。本学会は昭和47年に「炎症研究会」として発足し、昭和55年に「日本炎症学会」に改称されました。さらに、平成13年には、今後の発展と炎症学と関連の深い再生医学との融合を図るため、名称が「日本炎症・再生医学会」と改名されています。国際炎症学会についても本学会がその母体となり、平成9年に第3回国際炎症学会を東京で開催し、さらにこの度、平成21年には第9回国際炎症学会（会長 松島綱治東大教授）を東京で開催する運びとなりました。

そもそも炎症とは、傷害を起こす刺激に対する生体や組織の防御反応と言えます。すなわち炎症の目的は原因となるものを除去し、傷害の程度を制限し、そして傷害を修復することにあると考えることが出来ます。炎症の原因には微生物、物理的、化学的刺激、免疫反応などがあります。種々の因子、すなわち免疫応答、炎症性メディエーター、血管拡張、内皮細胞の透過性亢進、浮腫性の腫脹、マクロファージなどによる貪食などが急性期の反応に関係しています。そして、急性反応の終了とともに、組織修復に向けた瘢痕、瘢痕吸収や回復における組織再生の反応が前面に出てきます。一方、原因が十分に除去が出来ない場合には、慢性炎症への移行することがあり、これにも多くの要素が関与しています。

多くの疾患に、これらの急性炎症、修復・再生または慢性炎症という一連の反応が関与していることはいうまでもありません。しかし、このように臨床上非常に重要でありながら、解決されていないことが山積している領域でもあります。この領域の研究は基礎生物学的な面白さがたくさんあると同時に、これらの解決が疾病の克服とも密接に結びついています。従来は基礎研究と臨床応用の結びつきが必ずしも強くない状況も多くありましたが、昨今のめざましい技術的進展も加わり、基礎的な発見を臨床の解決に役立てる方法論も確立しつつあります。すなわち、今まさに基礎医学、臨床医学、そして産業界が一緒になり、人類に課せられた難問に挑戦しなければならない時期であろうと思います。

この点で、炎症と結びつきの深かった修復、再生の領域を取り入れ、お互いの融和を図りつつ発展させる方向性を本学会が世界で初めて取り入れたのは、まさに当を得ているのではないかと思います。今回の第9回の国際学会は、世界的には未だに炎症の学会というスタンスですが、我が国の再生学の進展を取り入れた炎症・再生学の重要性を世界にアピールできるまさに好機とも考えられます。

炎症学に源を発した本学会が、その取り巻く学問的発展、社会的環境とともに変遷し、記念すべき第30回を、国際炎症学会とともに迎えることは誠に喜ばしいことと存じます。本学会の特徴ともい

\* Department of Allergy and Rheumatology, The University of Tokyo 東京大学医学部アレルギー・リウマチ内科教授

うべき、産学連携の立場も、科学技術の進展、国際的な新薬開発の流れで大きく変わりつつあるといっても過言ではありません。この節目の学会を国際的な視点で眺めつつ、次の10年、そしてさらにその次の発展の起爆剤としたいと思います。

日本炎症・再生医学会の会員の皆様の為に、会期の後半2日間のみ参加も可能というシステムも作りましたが、出来ますれば是非、6日より10日までご登録いただき、熱い炎症学と再生医学の討論にご参加いただければ幸いです。